

# 選考をふりかえって

「読書体験記部門」 高校生の部 選考長 中西 進

最優秀作に選んだ黒谷京叶さんの「私のwhat if s」は、道尾秀介の『鏡の花』の読書体験記ながら、みごとに「鏡の花」とよぶべきものの内容を汲み取った作品であった。

しかもそれは、一編を小説ふうには、読み物仕立てに述べられていて、if sがいかにも「鏡の花」であるかを思考したものになっていた。

このif sは透明人間になるような感覚も、鼻がハロウインの白雪姫に見えることも、また銀杏がビーチに見えることにも相通する。

それでいて現実には母の昔の、遠距離通勤・通学を考え、もし一人暮らしをしていればと思う瞬間の事として語るといふ構文に仕組まれていて、わたしを手玉にとる。

一方、優秀作に推した二編も仲々のものであった。

林奈緒子さんの「文字の禍」は中島敦の「文字禍」をもとに、ことばに対して持つ文字の機能について語ったものであったが、文字をもつことよって、人間が観察することを怠るといったり、ロングセラーになった本は「言葉の世界の虚しさを説いたものが多い」という書物を改めて引用する。『老子』を引き合い出すのは例の、文字ができたばかりに、魂は夜哭くことになったという古典『淮南子』をさすと思われる。

もう一つの鈴木陽菜さんの「未来の種をまく」は登山家の三浦雄一郎氏が学校長のクラーク記念ヒマラヤ小学校につながる貧困層の教育にふれた文章だが、強い鈴木さんの志が、張りのある文体でつづられており、すぐれた作品になっていた。

総じて入賞作は未来や現実を超える志によってつづられており、ジュニア層の文章として正道をいく、上等の文章であったことが歎ばしかった。